

武蔵野日曜集会

泉水

——ヨハネ伝第4章1～29節——

1967年9月10日（武蔵野）

小池辰雄

サマリヤの女 活ける水を与えん 永遠の生命の泉が湧き出でる 活水をください あるがままの自分を神さまの前に投げ出す 有無自在 この絶対なる我に全託しろ 玉砕玉成 来りて見よ 活ける水の源なる神 生命の泉 さつと霊界からのキリストの水を浴び光を受けとる もつと霊的な現実の世界に入れ

【ヨハネ4:1～29】

「主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しとパリサイ人に聞こえたるを知り給いし時、²（その実イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり）³ ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。⁴ サマリヤを経ざるを得ず。⁵ サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、この町はヤコブその子ヨセフに与えし土地に近くして、⁶ 此処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。⁷ サマリヤの或女、水を汲まんとて来りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言いたもう。⁸ 弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。⁹ サマリヤの女いう『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。¹⁰ イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」という者の誰なるかを知らんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与えしものを』¹¹ 女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井は深し、その活ける水は何処より得しぞ。¹² 汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』¹³ イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴ 然れど我があたる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』¹⁵ 女いう『主よ、わが渴くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』¹⁶ イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』¹⁷ 女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い給う『夫なしというは宜なり、¹⁸ 夫は五人までありしが、今ある者は、なん



じの夫にあらず。無しと云えるは真なり^{まこと}』¹⁹ 女いう『主よ、我なんじを預言者とみとむ。²⁰ 我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』²¹ イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。²² 汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。²³ されど真の礼拝者の、霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父は斯のごとく拝する者を求めたもう。²⁴ 神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』²⁵ 女いう『我はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、彼きたらば、諸般のことを我らに告げん』²⁶ イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』

²⁷ 時に弟子たち帰きたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給うか、何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。²⁸ ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいう、²⁹ 「来りて見よ、わが為しし事をことごとく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか』

●サマリヤの女

ヨハネ伝4章とマルコ伝10章というのは、伝道するのに非常によいキリストの実話のところであります。^{たとえ} 譬話でなくてね。私はしばしばここを、新しい所に行つては語りたくなくなるわけです。今日はそのヨハネ伝4章のところですよ。

¹ 主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しとパリサイ人に聞こえたるを知り給ひし時、² (その実イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり)³ ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。

ユダヤの方に来ておられたのは、^{すぎこし} 過越の祝いの機会であつたと思われます。それで帰られる。ヨハネの方は、なんといつても、悔い改めのバプテスマですから。キリストはそういった悔い改めのバプテスマという意味における水のバプテスマはなさらなかった。キリストはもちろんバプテスマをなさったが、それは御霊のバプテスマです。ただし、御霊のバプテスマを本式になされるのは、これはキリストが十字架にかかつてからの後の話でありまして、決定的なバプテスマにはならないです、イエスがこの地上にあられるかぎりには。そのことは弟子たちを見ればよく分かる。

とにかくしかし、キリストの実存がもちろん受けとられて、洗礼のヨハネとはケタ違いでありますから、弟子が多くなるのは当然です。

「³⁰ 彼は必ず盛んになり、我は衰うべし」(ヨハネ3・30)

と。ヨハネは自分が衰えるということをやんと知っているわけです。自分はキリストへの、福音への道標であると。道そのものはキリストである。



キリストは何もヨハネと争うことはないわけです。さつさとガリラヤへ引き上げてしま
う。エルサレムからガリラヤへ行く途中でサマリヤを通ることになる。サマリヤは実は、
ユダヤとは仲違なかつたいの間柄であることはそこにも書いてあるとおりです。にもかかわらず、
キリストはそこを通られた。

⁴ サマリヤを経ざるを得ず。

とありますが。ガリラヤへ行こうとすれば通らなければならなかった。

⁵ サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、この町はヤコブその子ヨセフ に与えし土地に近くして、⁶ 此処にヤコブの泉あり。

スカルから一キロくらい離れているそうですが。

イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、

レンブラントの有名な絵があるでしょ。もちろん、レンブラントの絵は、背景はオラン
ダ式な風景ですけども。ヤコブの泉はなかなか深い井戸であって、磐の固い所で岩盤を
えぐってある。地盤の固い所でそれだけ掘るのはなかなか昔の人は容易なわざではなかつ
たらしい。イスラエルへ行くと、今は灌水の設備ができていて、畑に水が潤うようになっ
ていますが、元来、水が非常に乏しい。水を発見したら、これはもう大変な奪い合
いになる。ヤコブの泉は深くてなかなか涸れないので、みんなが水を汲みに来るわけです。
何キロも通ってくるらしい。瓶とか革袋とかに入れて帰るわけです。

イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、

向こうはもう大体、3月半ばくらいから10月まではほとんど夏の状態です。そういう暑い
所ですから、歩けば喉が渇くにきまっています。イエスも喉が渇いた。

時は第六時頃なりき。

ちようどお昼頃です。

⁷ サマリヤの或女、水を汲まんとて来りたれば、

大体、お昼頃に水を汲みにくるというのは普通ではないので、朝か夕方に来るわけです。
ところが、これがお昼頃に一人でやって来た。

イエス之に『われに飲ませよ』と言いたもう。

「私に水を飲ませてくれないか」と。サマリヤの女は水を求めている。また自分も喉が渇い
ている。今その時に共通するものは真清水であるわけです。

みんな人々は何かを求めている。相手が、その人が、求めているものが何であるかを知
ることが伝道の上では大事なことなんです。この場合は、水を求めている。そしてまた、
自分も水がとにかく欲しいわけです。たとえ、欲しくなくても、相手が求めているその心
境に、その現実に関心を置くということは非常に大事なんです。そうすると、そこに共通
の場ができる。気持がちぐはぐであったり、求めているものと全然ケタちがいなものをい
きなり出して、お説教したって、それは伝道にはならない。かえって、反発を感じるよう



なものです。皆さんも、いろいろな人にでつくわすときに——いきなりキリスト教の講義ではないんだ——その人の心境に立ちいたって、それからだんだんそれをほぐして、そして、神の愛へと導いていく。求め以上に求めること、案内していくということが大事なわけです。

●活ける水を与えん

「私に飲ませてくれないか」と。非常に一応、和らぐわけなんだが、この女はちよつと簡単に和らがなかった。

8 弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。

サマリヤとは仲が悪いから、そう簡単に食物が買えるかどうかわかりませんけれども。

9 サマリヤの女いう『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる

我に、飲むことを求むるか』

ご承知のとおり、サマリヤを中心とした北イスラエルは紀元前712年にアッシリヤに亡ぼされて、多くの者がアッシリヤに囚われた。それからまた、アッシリヤの方からいろいろな人がやって来て、サマリヤは混血的になってしまった。モーセの十戒は捨てたわけではないけれども、ゲリジブの山を礼拝の中心としていたときです。けれども、信仰上また血統の上で——ユダの方は比較的に純血を保っていたものですから——仲が悪くなつて、サマリヤとユダとは犬猿な間柄のように、いよいよ仲が悪くなつていたものですから、ユダヤの人がサマリヤの女に水を求めるということはありえないことであり、またはけしからんことだと思つたわけです。

これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。

そういうことで交わりをしなかった。

10 イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」

という者の誰なるかを知らんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与えしものを』

「そんな、つっけんどんなことを言うけれども、もし、くれれば、もつといいものをやろうとしているのに。そんな今までの歴史的なことに囚われなさるなよ」

というわけです。キリストはここでもやはり敵を愛している。ところが、その「活ける水」という言葉を續いて使つて、

11 女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井は深し、その活ける水は何処
より得しぞ。』

と。まあ少し、この女は多少変わつてきた。「主よ」なんて言いはじめた。「けれども、杓もないのに、井戸は深いのに、どこから得ましたか」と。例によつて次元の相違がここにも表れている。

キリストが「活きた水」と言っている、その内容がつかまえていない。「リビング・



ウォーター」「活水」ですね。「活きた水」と言うし、またこれは「活かす水」であるわけです。人を活かす水。自分そのものが生きていなければ、活かすわけにいかない。「生命の水」という言い方がしてある。

12 汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』

非常に大事な井戸であつて、ヤコブというのはそれだけの大きな数々の大事なことをした人だが、それよりもあなたは偉い人かと。まあしかしそれだけの問いが出てきたのは、だいぶ気持が動いてきているわけですね。「何を仰るか」というようなわけでもなかった。

●永遠の生命の泉が湧き出でる

13 イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。
私たちがいつも飲んでいる水はその通り。

14 然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は
彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

それで、非常にはつきりしたことを言われたわけです。

「わが与うる水は彼の中にて泉となる」

と。私たちがとにかく求めているものは、暫定的な（ざんてい）ものではない。いついかなるときにでも、それが絶えないところのもの。即ち、永遠的なもの。人間は限界存在である。また、次元的な存在であります。その限界を超えたものとなり、また次元を超えたものになりたい根本衝動を無意識のうちにみんな持つっているわけです、そういう衝動というものを誰でもが。

「私は何年生きたら、もうそれでいい」

なんてなことを口では言うけれども、それで本当にいいなんて思っている人はない。できれば、いつまでも若々しくその生命力を保っていたいわけです。だんだん歳をとるにつれて衰えてくる。私は元気ですけども、とにかく歯は全部総入れ歯というように、だんだんダメになつていく。相対的な我々は結局どこかでもって地上でお終いということ。大体100年くらいで——コーカサスには100歳を越えた人がたくさんいるそうですが——それにしても200歳まではちよつと無理です。世界最高年齢は162歳だそうです。しかしながら、それが何歳であろうとも、その有限の中に無限なるものを持ちたいという要求を持つっている。その要求が本当に満たされるかどうか。その要求を持つっているということは、

「万人はこれ宗教人なり」

ということ。しからば、その宗教人であるところの実が満たされなくてはいいかん。その満たされることが即ち救いということ。です。

いわゆる喉が渴いて水を飲んだときは、なんともいえない良い気持です。お腹がすいてご飯を食べたより良い気持です。キリストが与える水はまたそれ以上な、これは何ものと



も代えることのできない水である。その水を飲んで、受けとって、自分自身が泉となると、
「彼の中に泉となつて永遠の生命の水が湧き出る」

と、そう言うんですから。

聖霊の事態は、もちろん祈りの世界で新しく受けとるという面もあります。と同時に、
内住して泉のごとく湧き出る。いつも、はたと気が付いてみたら、自分の中から泉のご
とく湧き出るものがあつた。こういうことになれば、信仰は本ものではない。ウソ
とは言わなくても、本当の信仰の本ものの世界では、そういう「泉となる」ことです。
これは聖書のキリストの言葉で一番大事な句の一つです。

「永遠の生命の泉がそこから湧き出でる」

と。涸れない。涸れない人。

断食はしても水は飲みます。それほど水は大事なものです。断食はしても空気は吸っています。
気と水はあい通じます。それを氣と言おうが、水と言おうが、あるときには火と言おうが、
みんなこれは聖霊に関することです。

●活水をください

ニコデモの場合と同じ具合に、ニコデモがキリストに、

「人あらたに生まれなければ、上から生まれなければ」

と言われたときに、

「またお母さんのお腹の中に入れるか」

なんてバカなことを言っているが、これも同じわけで、「杓ひしゃくがないのにどうして汲めますか」
と。

15 女いう『主よ、わが渇くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を

我にあたえよ』

「汲むために毎日やって来るのはやりきれない。そんな活きた水をもらって、もう

渇くことがなければ、それにこしたことはない。その水をください」

と、また面白い答えをするわけです。けれども今度は、井戸の水をやるのやらないの話
ではなくて、とにかく、

「さあ、活水をください」

というところに来たわけです。ヤコブの井戸の水を求めていた、それよりもひとつ次元の
違ったものを――サマリヤの女は知らないんだけど――次元の違ったものを求めるよ
うな角度をキリストは持つてきた。

だから、いくら聖書を研究し、ギリシア語ができ、ヘブライ語ができ、神学校を卒業し、
按手礼を受けて牧師になつたってダメだ、これを持つていなければ。活ける水についてい



くら説明したって、それはダメなんだ。「そういういい水がありますよ」と一生懸命で説明したって、みんなは喉の渇きがいつこうぬけない。

「さあ、私の中にあるものを皆さんにお分けしましょう」と、そういうようなことにならなければ、本当の伝道はできない。

私は1940年から伝道を始めたけれども、始めはこの「活ける水」は正直なかった。水については一生懸命で勉強していたけれども。ある時からこの水が来てしまった。だから、皆さんに水を分けて上げることができた。まだしかし、それを分けてもらっても、外側から見て、

「これはどうだろう、飲んでもいいだろうか」

なんて言って、一生懸命で研究している人は、いくら与えてもダメなんだ、飲んでくれない。飲んでくれたら、「ああ、本当でした」というわけです。伝道は水を本当に持つていなければ、伝道ということは言えない。また、それを持つていても、相手が飲むところまで来なくては。そこに伝道の二重の課題があるわけです。

●あるがままの自分を神さまの前に投げ出す

とにかく、

「何か知らんけれども、その活きた水というのをください」

と。そうしたら、

16 イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』

さあすっかり風向きが変わってしまった。キリストはすぐに与えようとはなさらなかった。

「夫を呼んできなさい」

と。なぜ、こんなことを言うかという、まだこの女は自分というものがある。この四角い自分を碎かないことには、与えるわけにはいかない。それで、キリストはそれを碎き、彼女の自己意識を——それは岩盤みたいなものだ——その岩盤を碎かなくてはいかん。岩盤みたいな固い女の心を碎く。それで、「夫をここに連れて来なさい」と言われたので、

17 女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い給う『夫なしというは宜なり、

「私には実は夫はいません」と。イエスは、「夫がないと言ったのはもつともだ」と。「よくも言ったね」ということです。

「夫を私は持たないとは、お前さんはよくも言った。よく、偽らずにあるがままに言いましたね」

ということ。「よくぞ言いけり」というわけだな。「自分は夫がない」と、自分をあからさまに、あるがままに言った。

あるがままの自分を神さまの前に投げ出すことが大事なんです。男はとかく身構える。女はとかく虚飾をはる。この身構えだとか、虚飾がなくならないとダメです、人間はある



がままにないと。

18 夫は五人までありしが、今ある者は、なんじの夫にあらず。

いかがわしい関係である、なんてなことをほのめかしているわけです。それはお前の夫ではないと。

無しと云えるは真なり』

過去も現在もキリストは見抜いてしまっているんだな。まあイエスというひとは驚くべきひとですから。桁違いであります。キリストはその人の現在・過去ないし未来までも分かっている。ペテロに、

「鶏が鳴く前に、自分を三度否むぞ」

と。その通りだった。

「あそこに行けば繋いである驢馬ろばがいるから、それを持ってこい」

なんて、みんなキリストは見えてしまう。過去と現実と未来を掌握しているような驚くべき永遠的存在であります。それは完全に——明鏡止水というけれども——明鏡止水以上の素晴らしい、神の映しそのものだった。それだものだから、驚きまして、

19 女いう『主よ、我なんじを預言者とみとむ。』

「あんたは預言者ですね」と。「先見者」とか、見る人、「予言者」あるいは「ナーミープ」とかいう。これは普通の人ではなかったといつて、今度は、問答は宗教問答に入ってしまう。だんだん、奥深くなっていく。

●有無自在

20 我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』

なんてなことを、「どういうことでしょうか」と。これは預言者だから、いろいろ聞こうと思つて、そういう問題を投げかけたわけです。

21 イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、』

「言うことを信ぜよ」ではない。

「我に信頼せよ。私により頼め」

と。「我を信ぜよ」でもいい。我に信頼せよと。

此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。22 汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。

そう預言されてある。

23 されど真の礼拝者の、霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来り。父は斯かくのごとく拝する者を求めたもう。24 神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』



と。さっきの、「泉が湧きいでる」という言葉とこの言葉は非常に大事な言葉です。

申命記27章11節から見ると、

「11その日にモーセまた民に命じて言う。12汝らがヨルダンを渡りし後は是らの者ゲリジム山にたちて民を祝すべし即ち……」(申命記27・11～12)

「ゲリジム山」とそこに出ている。神を祝福するところの礼拝の山としてゐるわけです。

「我らは」と言つたつて、キリストはもちろん、自分は本当の意味においては一人ですけれども、「我々、ユダヤ人は、ユダの者たちは」ということ。神に知られ、神を知る者。もちろん、始めは神に知られる方からです。詩篇139篇ですね。そのように知り給う神だから、私たちが神を知ることができる。我々の側から神を知ることではない。「知る」というのは、人格的に靈的に交わることが「知る」です。

「真の礼拝者の、^{まこと}霊と真とをもて父を拝する時きたらん」

と。どこの宗教でも、ファイファイ教でもメッカという場所を聖地として、メッカに向かって礼拝したりなんかしている。あるいは、比叡山とか高野山だとか、本願寺だとか、いろいろお寺だの山だのを中心として拝みをなしている。新興宗教でもそうです。悪くはないけれども。それでワッショイワッショイと巡礼をやつたり。そういうのがいわゆる宗教なんです。大伽藍を建てたり。ヨーロッパもこちらと同じこと。あいかわらずやっているわけです。

そういうエルサレムとか、ゲリジムとか、大きな神殿中心の宗教に対して、

「そんなものはぶち壊してしまえ、三日で建てるぞ」

と、まあ実にキリストはそういったものをぶち破るような言葉を発しておられる。内村鑑三先生が「無教会主義」というようなことをおつ始めたのも、そういった精神によるということは事実です。けれども、キリストは、そうかといつてなにも、

「さあ、神殿をぶつ壊せ」

と言つてぶつ壊したわけではない。

「これは祈りの家である」

と言つて、むしろ神殿で商売している者を追い出した。

「あんな神殿なんかどうでもいいから、大いに商売しておけ」
なんてなことは言われなかった。

要するに、相対的に有るも無いも、相対的に無いことでもいいのでもなければ、相対的に有ることがいいのでもない。問題は、何処をも無しとし、何処をも有りとなす。そういうような角度が本当の角度である。

「有れども無きがごとく、無けれども有るがごとく」

とパウロがコリント後書10章で言っている。

「10憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富



ませ、何も有^もたぬ者の如くなれども凡ての物を有^もてり。」（コリント後10・10）

と。そういう角度です。有^あ無^む自在^{じざい}ということ。有るも無いも自在なんです。無ければ無しでよし、有れば有りです。その本当の角度から絶対の有にしよう。それは絶対の無をつかまえているから。無教会がなぜ、そういった絶対の無に本当に徹しないか。相対的な感覚の世界で、有るの無いのなんて言っているかと思うわけだ。

そういうわけで、いわゆる宗教はみんな落第だ。それから、大がかりで伝道集会をワッショイ、ワッショイでやるのも——あのビリー・グラハムなんていうのはよくやるね——それは悪くはないけれども。キリストは道すがら、名もないサマリヤの女というたった一人のひとをつかまえて、これに本当の道を伝える。本当の自分を表わす。そうしたら、実にその女性を通して、そのあの方を読めばわかるように、村の人たちがみんな呼び寄せられてしまった。これが本当の世界です。

●この絶対なる我に全託しろ

「^{まじ}拝する者も^{まじ}霊と真とをもて^{まじ}拝すべきなり」

と。「真^{まじ}」というと、またこれが真実臭いようなことになってしまふわけだよね。そして、一生懸命で「純粹」とか「真実」ということにこだわらる。藤井先生が「純粹」だの「真実」と言ったものだからね。先生の悪口を言いたくはないけれども。私は先生の弟子だから、先生の真意を更にはつきりと言おうと思うわけだ。

その「まこと」というのは「あるがまま」ということです。「あるがまま」ということが即ち「砕け」なんです。「砕け」というのと「あるがまま」というのとは同じことです。「あるがままを投げだす」ということ。あるがままに「俺は」と言っただんばることではない。あるがままに投げ出されなければダメです。あるがままに投げ出されるところが即ち「砕け」という。なにか自分で力んで自分をぶち壊すようなことではない。あるがまま、分裂のまま、頑ななまま、傲慢なまま——何でもい——そのまま投げ出されなくては。その「投げ出し」が「砕け」です。「自分で自分を粉碎して、純粹な何も囚われない心になろう。それが砕けだ」なんて思っているか。そんなことをしたらつらいですよ。

私が「無」と言うときに、皆さん、どうぞ誤解しないでくださいよ。そういうような砕けにおいて賜る世界が「無」なんです。自分で「無」なんかになれっこない。その砕けにおいて賜る世界が無という。即ち、自分が本当に投げ出されたものを全部持つていくと、キリストは受けとつてしまう。

「我により頼め」

というのがそうですよ。

「お前が私に体を投げかけなさい」

というのがこの「より頼め」ということ。「より頼む」というとなにか、自分がまだこつち



側にいて、自分の気持で心のところで「信頼する」なんて思っているから、そんな「信頼」はダメだ。本当の「信頼」というのは自分を完全に全託してしまうこと。

「お前が強かろうが弱かろうが、立派であろうがなかろうが、私に全託せよ。自分の相対的な善悪なんてものはダメだ」

と。そういうことです。

「相対的な善悪を量っているうちはダメだ。全部それを私にぶちまけてごらん」

というのが、「我により頼め」「我を信ぜよ」ということ。こつち（神・キリスト）が絶対の世界で、相対がどんなによかろうとダメなんだから、相対の世界は。

「この絶対なる我に全託しろ」

と。それが

「あるがままに投げ出せ」

ということ。そうすると、全託したんだから「空っぽ」になる。空っぽにされます。しかし、その「空っぽ」はまだ本ものでないから。その「空っぽ」を本当の空っぽに、同時に空っぽにするには十字架が必要なんだ。私たちが自我というやつから同時に無私の世界の、罪からの解放という——「私無き」ということは、いくら投げ出したってダメなんだ、自分はいかかわらずまた投げ出さなくなったりする——そこは十字架に投げ出してみたら、もう根底的に投げ出されたる自分をそこに見るわけです。

「われキリストと共に十字架せられたり」

と。それは

「われキリストの十字架において投げ出されたる我を見たり」

です。そうしたら、それは完全に無私ですから。あいかわらず無私でなかろうがあろうが、そんな相対的な自分なんてものはや問題でない世界がそこに出来ている。十字架の贖いです。

●玉碎玉成

砕けそのものを、投げ出しそのものを。投げ出しそのものを、砕けそのものを、キリストの十字架で受けとつたら、これが「まこと」ということです。これが「まこと」ですよ。その霊魂の中に入ってくるものが聖霊です。その無の場に入ってくるところの、砕けそのものの中に入ってくるところのものは聖霊です。玉碎されてしまったんだよな。どんなものでも本当は瓦体なんだ、こつちは瓦落多^{ガラタ}なんだ。瓦が破^{かわ}けている。瓦が破けたら今度は、玉と成る。玉成^{たまなり}する。瓦碎^{かわ}したらば玉成する。玉と成る。即ち、聖霊が来たら、これは玉と成る。泉となる。火となる。風となる。これが、

「霊^{まこと}と真^{まこと}とをもつて拝せよ」

ということの、私の決定版的な内容であります。



「まこと」という言葉にみんな引つかかる。何か人間の側の真実かと思う。やってごらん
なさい。苦しくなるから。自分でやってみれば分かる。こわばってしまう。パリサイになって、
「あれはまだまことではない」
なんて言う。

パウロはいわゆる熱心であった。パリサイ人の権化^{ごんげ}であった彼が真つ正面からこのキリス
トの福音に敵する者であった。だからとうとう、キリストは非常手段をもってこれをひつ
くり返した。彼はぶっ倒された。そして、パウロは完全に変質、変貌、変向された。180度
の方向変換と変質変貌させられた。この十字架をしつかり祈りの世界で受けとったわけ
です。だから、キリストの十字架に敵する者に対して、

「自分は十字架に敵していたから、今度は、私は涙を流してお前たちに言うが、
十字架に敵する者は、おのが腹を神とする者は……」

と言って、パウロがやっているわけです。だから、

「霊と砕けとをもつて父を拝する者は、霊とあるが、ま、ま、まをもつて拝する者は」

ということ。霊の世界は、あるがままでなければ、霊の世界にならない。心砕けないと。
聖霊の世界は、このあるがままのところに入ってくるんですよ。

「もう少し純粹になつてから、もう少し聖書を勉強してからでなければ、聖霊は入
らない」

なんて、冗談じゃない。あるがままのところに聖霊が入ってくる。あるがま、ま、まに投、げ、出、さ、
れたところに。投げ出されたんだ、あるがま、ま。あるがま、まを、そのま、まを神の前に、そ
ちら側に捨身となつて投げ出されたところに、そこに即ち「まこと」というやつがある。
その「まこと」中の「まこと」は十字架における自分のあるがま、まの姿です。キリストの
十字架は、千変万化の人の罪の姿をそこに映している。だから、

「霊と真とをもつて、霊と砕けとをもつて、御霊と砕けにおいて、父を拝する」

ということ。言い換えると、「御霊と十字架において」ということだ、もうひとつ言えば。

「十字架の下において、御霊において、拝する者は」

と。これが、罪が無となる、必ずもう既に来ていると。

「私がここにあるから、既にきている」

と、キリストは言われた。もちろん、それが本当に来るには、まだちよつと時間がいりま
したけれども。

このサマリヤの女に語ったキリストの言葉はもうもの凄い宗教革命です。もちろん、旧
約にその角度は預言者の中にあります。預言者はもちろんその角度だったから、彼らは御
霊の世界に、旧約的な霊の世界に入っているわけですけれども。

「野原であらうと、至るところこれ神殿である。至るところこれエルサレムの山で
ある」



と。それだけでは無教会の人も言う。けれども、その中身が本当に聖霊の充滿しているところの、聖霊に溢れている、そういう場がそこに生じない。一人なら一人、二三人なら二三人、どこでも。そういう御霊の展開をしてやまない、霊の投げ出しにおける御霊の祈りにおいてこそ、父が拝されるときが来る。「霊と砕け」と言ってもいいし、「霊と無」と言ってもいい。「霊と十字架」と言ってもいい。何でもいい。

●来りて見よ

25 女いう『我はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、

面白いことが書いてある。「キリスト」と「メシヤ」ということは同じことだ。「キリスト」と言われる救い主、メシヤのきたることを知っている、聞いています」と。

彼きたらば、

その人がきたらば、

諸般のことを我らに告げん

だから、相手がそうだとは思わない。それだけのことを言われても、まだ預言者くらいに、預言者の一人かと思っている。この告白から、キリストがとうとう自分を表わす。

26 イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』

と。それにしても、「水をくださいな」なんて言われるだけで、何も言わなかった。水以上の水、求め以上の求め、相対的次元から絶対的な次元へと、それを引き上げてしまう。そして、その事態を今度は、ズバリと、

「霊と真とをもつて父を拝するときに来た」

というようなことでもつて言われた。

27 時に弟子たち帰りきたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給うか、

何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。

「どうしたんだろう、おかしいな。イエスはサマリヤの女と話をしているが、あんな仲の悪いのと同じことだろう」なんて、いぶかしがった。

28 ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて

もう水瓶どころのさわぎではない。水はどつちでもよくなった。

人々にいう、29「来りて見よ、わが為しし事をことごとく我に告げし人を。

この人、或はキリストならんか』

まだ本当に信じてはいない。「キリストだ」と言っているのに、まだこれは少しダメだね。とにかくしかし、「来てみる」と言つて、その女性が伝道をおつ始めた。知らない間に証人となった。そういう非常にドラマチックな井戸端の問答である。



●活ける水の源なる神

旧約聖書を少し開きます。エレミヤ記2章11節あたりから、

「¹¹その神を神にあらざる者に易^{かえ}たる国ありや。然^{しか}るに我^{わが}民はその榮^{さかえ}を益なき物にかえたり。

神を神でないものに代えてしまった。偶像崇拜をやった。

¹²天よこの事を驚けいたく怖れよとエホバいいたもう。¹³そはわが民はふたつの惡事^{あしないて}をなせり。即ち活ける水の源なる我をすて自己水溜^{みずからみずため}を掘れり。すなわち壞^{やぶ}れたる水溜にして水を有^もたざる者なり。」(エレミヤ2・11～13)

活水の源、源泉。エホバの神さまは源泉である。イエスはその源泉の父なる神からいつも天来の真清水、天つ真清水を受けとって、生命を受けとって、彼自身が即ち源泉そのもののような泉にキリストはなつておられた。だから、

「この水を飲むものは、お前たちもみんな一人びとりが泉になる」

と。我々一人びとりが小泉になる——キリストは大泉だ——とにかく、我々はみんな泉となる。泉的存在になつたら、はじめてそれはキリスト者という。クリスチャンである。それまではまだレットル・クリスチャンだ。そのことがエレミヤに既に告げられている。自分で掘つたような水溜まりではダメだと。よんどしてしまう。腐つてしまう。本当に流れ出ない。涸れてしまう。濁つてしまう。それに対してこの活ける水である。

また、同じような言葉がエレミヤ記17章5節から、

「⁵エホバかくいいたもう、およそ人を恃^{たの}み肉をそのちからとし心にエホバを離^{はな}るる人は詛^{のろ}むべし。⁶彼は荒野に棄てられた者のごとくならん。彼は善事^{よきこと}のきたるをみず、荒野の燥^{かわ}きたる処、塩のあるところ人の住まざる地に居らん。

⁷おおよそエホバをたのみエホバをその恃^{たの}みとする人は福^{さいわい}なり。

エホバにより頼む者はさいわいであると。

⁸彼は水のほとりに植えたる樹の如くならん。その根を河にのべ、炎熱^{あつ}きたるも恐るるところなし。その葉は青く早^{はや}の年にも憂えずして絶えず果を結ぶべし。

即ち、水際に生えた樹のごとく——詩篇第一篇はエレミヤのこの言葉から来ていると言つてもいい——そういう水の流れから源泉を吸い込んで榮えるところの樹はどんなに早^{はや}が来ても枯れないと。

¹²榮^{さかえ}の位^{みかえ}よ原始^{はしめ}より高き者、わが聖所^{みよところ}たる者、¹³イスラエルの望^{のぞ}なるエホバよ、

面白い言葉だね、そういう言葉がある。

凡て汝を離るる者は辱められん。我を棄つる者は土に録^{しる}されん。此はいける水の源^{みなもと}なるエホバを離るるによる。¹⁴エホバよ我を医^いし給え、然らばわれ癒^いえ



ん。われを救いたまえ、さらば我救われん。汝はわが頌^{ほむ}るものなり。」(エレミヤ17・5、14)

と。「活ける水の源なる神」とある。こここの「活ける水」という言葉は、なにもキリストがつくった言葉でない。ちゃんと旧約に出ている。

●生命の泉

なお、聖書から「泉」というような言葉を拾いだせば、方々にある。特に、ゼカリヤ書13章1節に——これはキリストのことを予言しているようなところ——ゼカリヤ書は旧約聖書の終りから二つ目です。

「その日罪と汚穢^{けがれ}を清むる一つの泉ダビデの家とエルサレムの居民^{きよみん}のために開くべし。」(ゼカリヤ13・1)

とある。これはキリストの予言の言葉です。罪と汚れを清めるところの一つの泉がダビデの家とエルサレムの居民のために開く。そういうメシヤ、キリストが現われるという。

まだまだ拾いだせばいくらでもある。詩篇の中には随分出てくる。詩篇114篇に、

「主は岩を池にかかわらせ、石を泉^{ほとけ}に変わらせたまえり。」(詩篇114・8)

なんていうことが書いてある。石から泉が迸^{ほとけ}る。このことはモーセがやったですね。そして、

「泉が迸^{ほとけ}るこの岩はキリストである」

とパウロが言った。箴言の10章11節に、

「義者^{ただよもの}の口は生命の泉なり。悪者^{あしきもの}の口は強暴^{あつぱい}を掩^{おほ}う。」(箴言10・11)

とある。「義者の口は生命の泉なり」と言うほどに、「泉」ということはなかなか著しい字なんだ。詩篇36篇に9節に、

「そはいのちの泉はなんじに在り。われらはなんじの光によりて光をみん。」

(詩篇36・9)

という有名な言葉がある。

「生命の泉は、汝、神さまにあります。我らは汝の光で光を見ん」

という。太陽の光で見えるのではない。あなたの光で光が見えてくるという。

それから最も著しいところのひとつは黙示録7章17節です。

「^{みくら}17御座の前にいます羔羊^{こひつじ}は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡^{すべ}ての涙を拭^{ぬぐ}い給うべければなり」(黙示録7・17)

という。天国的な消息です。まあ聖書の箇所はそういったことで、いろいろあります。

問題は、皆さんがなにか事柄に行き詰まったり、ある時点で行き詰まってみたり、また、なにかでもって非常にどん底に突き落とされたことになってみたり、いろんな意味における苦杯を飲んだり、とにかく——ヤスパースがそれを「限界状況」と言いましたが——そういういった極限状況、限界状況にやってきたときに、そこにこそ実は救いの転換点があるこ



とに気がつかなくては。

高山樗牛ちよぎゅうという名文家の文章中に、

「己の立てる所を深く掘れ。そこには必ず泉あらん」

という言葉がある。自分の立っている所を深く掘ってみろ。そこに必ず泉があると。行き詰まって尻餅をついたところ、そこが実はキリストの懷の中であるということに気がつかなくてはいいかん。それを「絶対」というんです。絶対的に行き詰まったと思ったら、実はそれは絶対的に救われる場所であつたと。この気合を——気合と言つたらおかしいけれども——この消息をつかまなかつたら、信仰の世界はいつまでたつても始まらんですよ。あの相対的なものを無理押しして、そうしたら自分はずっとよくなるだろうとか、そんなことを期待していたらいつまでたつても始まらない。いついかなるときも、そこにおいて実は泉が湧き出るところである。どんなに暗くても、光が射すところである。そこに光がある。暗黒のただ中に光あり。渴けるどん底に泉あり。冷たきところに火あり。ということである。あなたの方のお腹なかの中から——お腹といったって、ただこのお腹ではない——存在のお腹の中から、行き詰まってみて、そして本当にさっきの「投げかけ」、あるがままの投げかけをして、

「主さまー」

と叫んで、自分があるがままに、行き詰まったあるがままの姿で投げかけたときに、そのときに初めて本当に霊の祈りが出てくる。その場にこそ御霊は臨みたまう。

●さつと霊界からのキリストの水を浴び光を受けとる

キリストが一人びとりを救っている場面を見てごらん下さい。このサマリヤの女だつてそうだよ。一人で少し問題の女でしょ。だから、あんまりみんなに相手にされないで、とぼとぼやって来た。彼女は限界状況です。ところが、この限界状況の彼女に——ちゃんとキリストは見抜いた、ああ気の毒な女だと。しかし、救いには絶対に例外がない——いや実にそういった状況にこそ臨んでくる。実は相対的なもので満足している人は気の毒なんだ。ザアカイがそうだし、十字架上の片一方の盗賊がそうだし、取税人がそうだし、みんなキリストが100%に受けとる者は、みな何らかの意味において極限状況にある。ところが、自分を「あるもの」と思っている者はみんなダメ。「最も善い」と思っている者は最もダメ。パリサイなんだ。

私たちは、

「この頃少し身体の状態が悪い」

「精神状態が悪い」

「環境がどうのこうの」

とか、そんなことを言つて、どうぞ、相対的な事情、状況というものをくよくよなさらない



いください。いや、いい加減なことで満足していることが危険でありますから。そんなことではいかん。本ものの世界にいるのが隠れてしまう。そのいい加減なものを今度は投げ出さなくてはいいかん。そのいい加減なままを投げ出していく。70%善きものを、80%善きものを、また、マイナス5であろうと、10であろうと、とにかく、どういう状況であろうと、そのまま投げ出すことが、これが信仰の秘訣であります。そして、いつも絶対の次元の世界に、その次元の中に、

「大丈夫、この泉だ。このキリストの生命だ」

というものを湧き立たせる。これは常に泉の湧く秘訣は心が祈り、であることです。

「祈り」なんていうことは、なにか言葉で祈っているということではないですよ。もちろん、そういう祈りも祈りであるわけですけども。全存在をもってキリストの水を浴び、光を浴びている、その態勢が祈りということです。このキリストを、さつと霊界からのキリストの水を浴び、光を受けとっている。そういう態勢が即ち祈りですから。そこに気がつけば、泉は必ず湧いてくる。また、自分の中に実は賜っていたと。湧いている泉を自分で塞いでいたというようなわけであります。

そうなってきたらば、キリストの世界、神の霊は、行き詰まりを知らないことになる。それをぜひ——そのためにはやはり、個人一人となり、また幾人か集まってなり——祈りを深めることです。そして、なにか事をするのではなくて、なにか事をおつ始めるのではなくて、必ず祈りの心をもってそれにとりかかること。自分を投げ出してとりかかるんですよ。構えてはいかん。

そのようにしたらば、ヨハネ伝のキリストのこの、

「^{まじし}霊と真とをもって父を拝する」

というのは、

「霊と真とをもって父と共に生きる」

ということ。「霊と真とをもって拝する」というのはただ拝むことではない。

「霊と真とをもって生きるとき来れり」

と。我々が生きることが本当の礼拝だから。御霊と投げ出しをもって生きるときに、我々の日常は、もう言うことが為すことが全部、泉のほとばしりの如くにだんだんなっていくわけですね。そのためには、ただ祈ってたつてダメです。

「十字架において投げ出されている自分にただ気がつく」

と言いましても、その気がつくときにはやはり、自分が本当に求めているなくては。その事態に投入することが本当の求めなんです。いわゆる自分というものがあつて、そしてまた求めるのではない。神さまの方では、ここに書いてあるでしょ、

「そのように拝する者を求め給う」

と。神さまの方では、そのように拝する者を、「どこにいるかなあ」と思って、一生懸命で



見ておられる。気がついたら、神さまは私を観察しておられたと。「はい、はいでございます」という、そういう生き方をする。

●もつと霊的な現実の世界に入れ

『碧眼録』九六則の趙州三転語にこういう面白い言葉がある。

「泥仏不渡水。金仏不渡炉。木仏不渡火。」

土作りの仏は——偶像です——水を渡ることができない。水の中ではみんなダメになる。金作りの仏は炉を渡らず。炉の中に入れると溶けてしまう。木作りの仏は火の中に入れると燃えてしまう。そういった偶像的な仏ならざるものを拝するなど。もつと霊的な現実の世界に入れというわけです。

我々のキリスト教においてはいわんや、いわゆる相対的な、「教会でなければならぬ」だとか、「無教会でなければならぬ」だとか、「カトリックでなければ救われない」だとか、そんなバカなことはみんなない。問題は、キリストとの御霊における砕けの直結である。それが本当の礼拝であつて、そこに生くることが礼拝である。

どうぞ、皆さんは、そういう実存をもつていよいよ証をしていただきたい。それで行き詰まりを知らない人になる。時々、手紙で

「どうもこの頃は……」

なんて書いてくるが、「この頃」も何もない。

「いつでも、どんな状況においても」

というのが使徒的信仰なんです。まあ若い人は一足飛びでそこに行かなくなつて、そう慌てることはないけれども。私のこの気合は、とにかく端的に受けとつていきなさいよ。そうしたら、本ものになつていくから。

